

阿久比短歌の会「風」令和八年九月 定例歌会作品

シユルシユルと音立てて昇る二尺玉
つと止（とど）まれば吾も息を詰む 講師 中野富恵子

一条の航跡残して空を飛ぶ
行き着く先は平和な国か 大村 浩嗣

わだかまり抱える我を知るごとく
猫は静かに傍らに居る 山口 道子

珍しく庭から覗く外猫に
餌場覗けばありの群がる 南 比左子

雲梯に区切られた雲を掴むよう
先へと進まんひとつひとつ 木下由香理

使い良き鎌を買はむと思いつつ
いつしか二年経ってしまひぬ 山下喜美子

年経れば憂き事多くなるばかり
覚悟すべしと先輩の言 榊原 紘子

旧友の写真展見名古屋まで
煌めきの時を作品に見る 大村 峯子

母逝きてお地藏さんのよだれかけ
帽子見つかり我が納めぬ 稲葉 富子

任せればA-のヘルプ完璧で
ご飯が炊けた風呂が沸いたと 馬見塚まり子

今のなほ君の毒舌胸がすく
「身をいとしめ」と追伸にあり 新美 京子

うつ伏せに寝る癖今も身に付いて
セピア色の夢くりかへし見る 北中 祥子